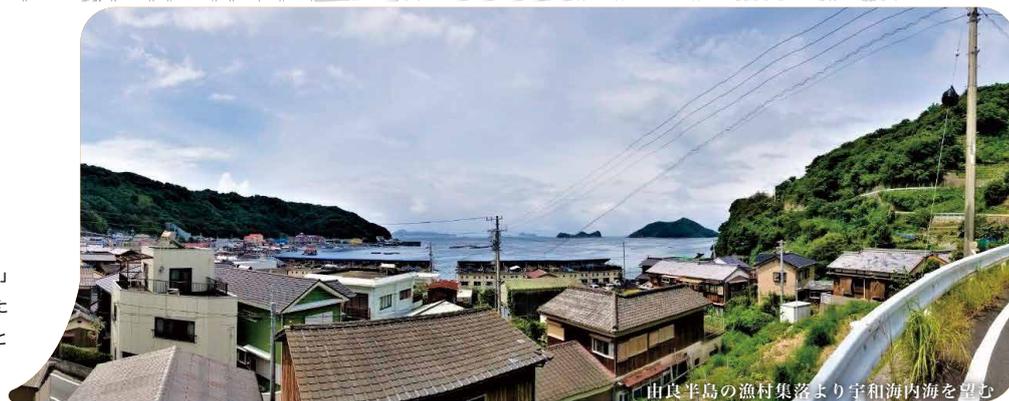


## 日常の中で、 非日常を思う

*Think About the Unusual in Usual Life.*

大学院修士1年演習「復興デザインスタジオ」が最終発表を迎えた。愛媛県南予地域を対象にした今回の演習での取り組み、履修生の見た事前復興という課題を特集する。



由良半島の漁村集落より宇和海内海を望む

## 復興デザインスタジオ「宇和海をデザインする」

text\_MAEYAMA /M1

*Urban Redesign Studio - "Design Uwa-kai Sea."*

4月から始まり、約3カ月に渡った復興デザインスタジオの最終ジュリーが7月8日に行われた。今回の演習では「宇和海をデザインする —南海トラフの事前復興—」と題し、愛媛県南予地域にあたる伊方町・八幡浜市・西予市・宇和島市・愛南町の5市町村が対象とされた。今後30年以内の発生確率が70～80%とされる南海トラフ地震、それに伴う津波浸水被害に対して今からできる空間や制度計画を事前復興として提案することが課題であった。

演習ではグループ内での議論を中心に、現地での視察やヒアリングを行い、東日本大震災での復興に携わった先生方のレクチャーやエスキースを受けた。建築、社会基盤、都市工学の3専攻合同での演習は修士1年の学生にとっては初めての経験であり使う「言語」や考え方の違いに戸惑うこともあったが、各班とも最終ジュリーでは地域に向き合った特色ある提案を発表した。各班ごとの提案やそこで感じたことについては、次ページより紹介する。

## 現地発表だったはずの日 —愛南町で見た風景

*I visited Ainan City on the day when we supposed to make Final Presentation.*

最終ジュリーから約2週間後、役所や自治会の方を対象に現地での成果発表が行われる予定であった。しかし7月初旬に起きた西日本豪雨で、宇和島市および西予市で深刻な被害が生じたことにより現地発表は延期となった。比較的被害の少ない伊方町、八幡浜市、愛南町では後日様子をみて行うということになっているが、未だその予定は決まっていない。津波浸水への事前復興を考えていた

自分たちにとって、その対象地で起きた豪雨災害は割り切れない気持ちを抱かせ、防災というものの難しさを改めて知らしめるものだった。

自分がこの演習で対象としていた愛南町に、現地発表の予定だったその日、訪れることにした。豪雨災害を経た南予地域のひとつの町のすがたを見る。



△ 御荘を流れる僧都川  
豪雨により左手堤防の下から2ブロック目まで増水した

町の様子は調査に訪れた3カ月前と大きく変わらないように見える。道の駅には地元の方々が買い物に来ていて、観自在寺にはお遍路の参拝者が絶えず訪れていた。しかし、御荘も確かに豪雨の影響を受けていた。観自在寺の職員の方によると、交通が制限された影響で食料品は一時品薄になり急遽町同士で援助し合っで対処した。観自在寺の傍にある飲食店の店主は、豪雨があつてから来訪者が大幅に減っていると話していた。被害を経て備えの必要性を感じた住民もいれば、何をすればいいかわからない、何もする気はないという住民もいるようだ。



△ 観自在寺には交通状況をまとめた貼り紙が用意されていた

愛南町は愛媛県の最南に位置し、その中心市街である御荘地域にはお遍路の四国40番札所である観自在寺を擁する。今回の演習で愛南町を担当したグループが提案の対象とした場所の一つがこの御荘であった。

西日本豪雨では町内最大の河川である僧都川中流域の一本松地域で数軒の床上および床下浸水の被害が生じた。また、高知県宿毛につながる国道56号は一時冠水により通行が制限された。

御荘地域では僧都川の増水は見られたものの、直接的な被害は少なかった。



△ 観自在寺本堂  
不安定な天候にも関わらず参拝者が次々訪れる

改めて訪れた愛南町は、山の斜面が海につながる美しい風景があり、その地形を生かした豊かな生業があり、穏やかで落ち着いた街並みをもつ、心地よい町だった。だが、斜面には土砂災害のリスクがあることも津波浸水の被害が予想されていることも、この場所と切り離すことはできない。「非日常」に思える災害のリスクは、日常の中に確かに存在している。目を背けてしまいうるリスクと日常から向き合っで暮らすこと、それができるといふ計画をすることが必要なのだと、この演習や南予地域への訪問を通して考えるようになった。

# 各班の提案

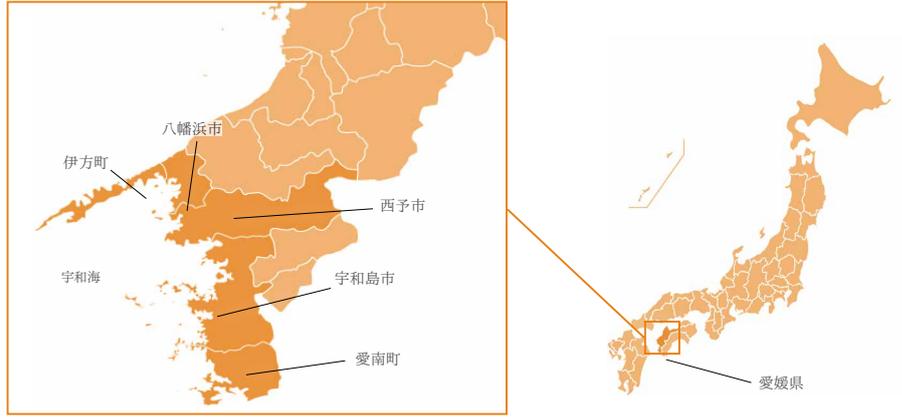
Our Proposal in Five Cities.

演習の対象地は右地図の5市町村、伊方町、八幡浜市、西予市、宇和島市、愛南町。それぞれの市町村について、建築、社会基盤、都市工学の分野から集まった6人で班を結成し課題に取り組んだ。

各市町村は、山がちで海に近い地形や主とする産業としての柑橘栽培など共通するところもあるが、丁寧に土地を見ていくと、多くのそこにしかない特色が存在する。想定される被害やその程度も、場所によって様々である。結果、提案も特色あるものとなった。

これらの提案は津波被害を想定したものであり、様々な災害への対策には不十分なところもある。今回取り組んだことがこれからどう活かせるのか、が今後の課題である。

今回はそれぞれの提案を、各班で都市工学の視点から参加した履修生に紹介してもらった。



班員構成 (建…建築 社…社会基盤 都…都市工学 数字は人数)  
 伊方班 建2 社2 都2    八幡浜班 建3 社2 都1    西予班 建3(うち留学生2) 社1 都2  
 宇和島班 建2 社1 都2    愛南班 建3 社1 都2



3か所への3つの空間提案で成り立つ提案です

## 伊方町 Ikata-cho

伊方町班では、佐田岬半島に点在する55の集落それぞれの地形や文化、暮らし方などのアイデンティティを引き継ぐことを大きな目標に、それぞれの集落が複数のネットワークを形成し、今あるものを活かしながら集落ごとの役割づけをすることを方針としました。

具体的提案として、津波被災の考えられる漁港地域と、近接する山の中腹部の集落が異なる立地条件・リスクをもつことに着目し、それぞれ「仕事場・遊び場」「空き家改修と集落内の共有空間の整備モデル」、これらの中間にあった廃施設のリノベーションによる観光の拠点かつ一次避難先となる空間を提案しました。

(M1 奥澤)

## スタジオを終えて① 地域デザイン研究室M1 伊方班 奥澤 理恵子

今回の復興デザインスタジオは、愛媛県宇和海沿岸での事前復興。「未災地」だからこそ自由度や可能性、そして事前復興を考えることが重要で面白そうと感じて始まったスタジオでした。私が扱った伊方町は半島に集落が連なり、海と山、自然環境の中に暮らすような環境である一方で伊方原発が立地し、様々な災害リスクを抱えています。

事前復興、さらに様々な災害が予測される場所、というのは、チャレンジングなテーマでしたが、その中で最後には扱った集落と、半島全体の両方に還元できそうな提案にいきついたように感じられたのは良かったです。

3専攻でのグループワークで、相対的に都市工なりの強みが何となく見えたことは学びで、また成果としても地域へ建築で横断した提案ができた実感があり、よい経験でした。

今回対象にした南予地域のなかには、7月の豪雨災害で大きな被害を受けた地域もあります。ジュリー前の発災、改めて災害はいつでもどこにも起きうること、そして自分たちが事前復興として考えたことの可能性や必要性を、現実味を以て感じました。

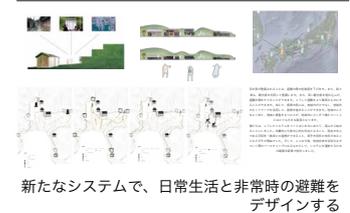
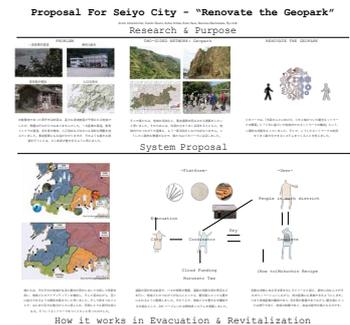


上：山に張り付く集落。特に伊予灘側に多くみられる  
 下：提案の対象とした漁港の集落

## 西予市 Seiyō-shi

合併により市域の拡大した西予市では、それぞれの集落の繋がりが求められ、また空き家の問題への対処も必要となっています。その中で我々は地域資源であるジオパークを用いてネットワークを強化することを構想しました。観光客が、空き家をリノベして利用するDIY版Airbnbを考え、その中で避難路となる道路の沿道を優先的に行うことで、町の産業と安全性の双方に資することになります。地域資源で市の内外から人を集め、その地を知る人を外に増やすことで、復興が進めやすくなります。さらに市内の高山を詳細に考え、普段は観光と日常生活に使い、災害時には避難所や避難路となるものとして、宿泊や飲食のできるセンターと、等高線沿いに寺や墓、防災倉庫を結ぶ道を、設計しました。

(M1 原)



新たなシステムで、日常生活と非常時の避難をデザインする



左：明浜町より海を望む。美しいリアス式海岸は津波を増幅させる...  
 右：石灰岩壁のセンターは公民館、観光拠点、避難所の機能を持つ



2つの海岸線に沿った暮らしのための空間提案



上：確実な避難と早急な再建のためのマスタープラン  
下：市街地のの大部分は6~9m浸水する

## 八幡浜市 Yawatahama-shi

埋立と段畑の開墾で土地を広げてきた八幡浜で、生業を維持しながら現地再建を行なっていくための提案を土地利用計画中心に行なった。

人口減少を昭和初期の人口規模に戻ることと捉え、低地部の産業拠点を活かしながら生活拠点を埋立前のかつての海岸線まで下げることで事前復興とする。高台にある中学校を小中併設化し、学校の統廃合に合わせて教育の拠点と交流の場を高台に集約。選果場を低地部に移転し、港湾機能と合わせて産業・観光の拠点化。被災後は高台での教育と低地部での産業を早急に再開しかつての海岸線に沿った内陸から生活を再建していく。(M1 仙石)



住などの新しい機能を入れて商店街を暮らしの場として再構築する



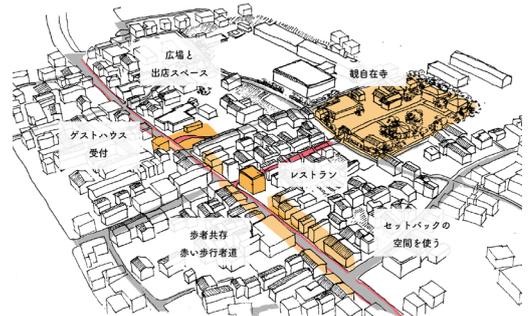
左：中心部の商店街には近年高齢者施設などの機能も入り始めた  
右：防災や復興を鑑みた道路線形、施設配置へ改善する



## 愛南町 Ainan-cho

愛南班は、沿岸集落である家串と町内の中心である御荘をとり上げ、沿岸集落から御荘への避難を想定した提案をします。

集落のほとんどが浸水域、道路冠水による孤立が予想されながら数日滞在できる避難所が無い家串では、山に沿った畑の道「八タミチ」でつながる2つの避難所を設けます。この避難所は家串や他の集落の人も日常的に利用する場所となります。門前町である御荘では来訪者が多いことを活かし、商店街を一つの旅館のように変えていきます。日ごろから様々な集落の人々が関わり合う場所をつくることで、発災時の避難の精度をあげ、避難中も安心感を得ること、避難に伴う居住地の移動への抵抗を和らげることを図ります。(M1 前山)



様々な機能が散らばり人々が知り合う工夫がされた御荘・寺前の商店街



左：家串の山斜面には段々畑の跡が残る



右：「八タミチ」でつながる避難所の一つはキャンプ場としても使われる

## 宇和島市 Uwajima-shi

### 「商店街から始める事前復興」

南予地域の中心都市である宇和島市は、市街地全体において人口や諸機能の拡散と低密化が進みつつある、有事の復興の進行を停滞させないため、日常的な中心性を持ち得る地区を選定し平時よりその中心性を高めながら災害への備えを強化することを本計画の狙いとした。そこで江戸期からの市街地であり生活の中心であった商店街（「宇和島きさいやロード」）とその周辺地区を計画対象地として設定した。

計画は「都市構造のアプローチ」「人の暮らしと活動のアプローチ」の二つの枠組みを設け、前者では土木/都市計画的なスケール、後者では建築的なスケールでの提案を行う。(M1 道家)

## スタジオを 見守って

地域デザイン研究室 M2  
八幡浜班 TA  
永門 航

お疲れさまでした。南海トラフ事前復興という主旨のもと、宇和海という地域と悩んで向き合う、貴重な時間になったのではないかと思います。TAとしても、ともに学ぶよい機会になりました。

3ヶ月間にわたって議論を聞きながら、それぞれの地域は多面的で、住まいから産業まで、包括的に扱うことは難しいけれど、こと「復興」と名のつく場面ではそれをシビアにやらなきゃいけないと改めて実感させられました。どういう空間が、システムが、地域を支えるのか、どう「事前から」手を打つかということに、それぞれなりの答えを出していたと思います。

# 国際都市計画史学会、開催！

18th IPHS Conference held in Yokohama!

国際都市計画史学会 (IPHS) は、今年で 18 回目を数える国際学会です。2 年に一度世界各地の都市が開かれており、単に部屋の中での議論に留まらず、ツアーやエクスカージョンなども企画されています。

今年の開催地は横浜、学会の議長は当研究室の中島直人准教授。企画から運営まで、都市計画遺産研究会のメンバーが中核となった実行委員会が行いました。

横浜は、都市計画が行われてきたまちのなかで、世界の都市と肩を並べられるまちとして選んだとのこと。中島准教授のもと、学部生からドクターまで研究室総出のイベントとなり、会場設置の手伝いや当日の受付・案内から、セッションに登壇しての研究発表、ツアーの同行・通訳に至るまで、表に裏に関わりました。

## “都市計画遺産”横浜市開港記念会館

IPHS のメイン会場となったのは、横浜市開港記念会館。開港 50 周年を記念して大正 7 年に「開港記念横浜会館」としてオープンしたものの、同 12 年の関東大震災で大部分を焼失しました。その後 2 度の復元工事により、今では大正時代の建築様式を後世に伝える“遺産”となっています。



会館を交差点から見上げる



大講堂。基調講演もここで行われた



大正期の意を忍ばせるアーチ窓

まさに計画史において重要な意味を持つ建物で IPHS が開かれ、そこで様々な都市史に関する議論が飛び交っているのは、建物を維持し守ってきたたくさんの人々が背景にいたからこそなのだ、帰り際にふと建物を振り返って思いました。

# YOKOHAMA 2018

THE 18TH IPHS CONFERENCE

text\_NAKADO/M2

IPHS は 7 月 14 日から 19 日にかけて行われ、その全容はここに書くにはかなりボリュームが大きいので、研究室のメンバーによるリレー記事として Web マガジンに掲載しています。そちらも合わせてご覧ください。

この頁では学会のほんの一部分だけ、IPHS のメイン会場となった開港記念会館の様子と、IPHS の準備に深く関わり当日はセッションも行った当研究室の博士課程 1 年・三文字氏のお話を紹介します。

## セッションを終えて



三文字さんは今回登壇者として、日本統治時代の台湾の遊郭立地についての発表を行ないましたが、実際に海外の方と議論してみようと思いましたが？

三文字：本当に有意義だったと思います。僕の発表の題目を目にして聞きに来てくださった方もいたりして。集まった方もアジア人だけでなく、欧米の人もたくさんいました。ヨーロッパに台湾学会のようなものがあったりするのだけれど、「来年はロンドンで台湾についてやるからそっちにも顔だしてくれ」なんて言われたりもして、繋がりは本当に増えました。その場だけでなく、フェイスブックでのフランクな繋がりも生まれたり。最初は国際学会怖いのかと思っていましたが、実際に参加してみて、本当に建設的なコメントが飛び交って嬉しかったです。

参加者としてだけでなく、運営側としてもポスターや資料の作成も手がけましたよね。

三文字：今回は 100% 僕のデザインです。国際学会という場で作りたいものを作れたのは単純に楽しかった。何よりトップが都市デザイン研出身の中島直人先生・伸先生だったこともあって、なんだか久しぶりで懐かしい気持ちになりました笑。ご一緒できてよかったです。



会場で配布されたパンフレットと、IPHS スタッフシャツ。どちらも三文字氏のデザイン

-三文字さんありがとうございました、そして学会お疲れ様でした。(聞き手：中戸)

## Information



### Hey listen, - ちょっと聞いて!

7.12 集住設計最終ジュリー



12 日、学部 3 年生の集住設計の最終ジュリーの様子。都市デザイン研からは、農学部から進学した M1 小田島が演習に参加。忙しさを合間を縫って発表しました。(M1 原)

7.21 UDC コンペ・シンポジウム @ 松戸



今年 2 月に行われた UDC コンペに地域デザイン研究室と合同で出展し、松戸市長特別賞をいただきました。21 日、審査委員長を務める西村先生の前でプレゼン。(M2 中戸)

7.12-15 ニュー井戸端展 & 絵はがき大賞



文教建築会ユースメンバーが文京シビックセンターで展示を企画・作成。文京区内のまち開きスポットを展示、来場者 1000 人以上を集めました。(M2 岡山)

7.26 研究室暑気払い @ 14 号館屋上



修士研究ジュリーを終え、14 号館屋上でお酒を飲み、肉を焼き、そして一人一人夏の抱負を語りました。今夏も各々の考える先に向かって頑張らしましょう!(M1 原)

夏休みを前に、ジュリーやスタジオの発表など締め切りラッシュとなりました。紙面には書き切れなかったこともたくさんあるような、濃密で忙しい 7 月でした。

## 7月のWebマガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



7.14-19 IPHS に携わって①-④  
研究室のスタッフとして IPHS をお手伝いしました。その様子をリレー記事にて掲載しています。(マガジン編集部)



7.24 高島平ヘリテージ mtg 開催!  
今回の議論テーマは高島平の「みどり」について。駐車場や農地、公園の変化を追いました。(M2 但馬)

## 8月の予定

### Lab Meeting

夏休みのため、会議はありません。

3rd (Fri.)	富士吉田 PJ 富士保育園夏祭り
5th (Sun.)	こちらのゾーン 真夏の種まき会
5th-12th	杭州サマースクール
9th (Thu.)	『都市計画の思想と場所』出版
12th, 13th	浦安 PJ よみとき展示会
18th, 19th	富士吉田 PJ 駐車場社会実験
22nd-26th	カトマンズ PJ 集落調査
26th, 27th	富士吉田 PJ 火祭り
中旬~下旬	内子 PJ 現地調査・シンポジウム準備

## ✳ 編集後記

愛南町を訪れるために松山に入った日は、商店街のお祭りの日でした。アーケードに並ぶ屋台には、商店街に店舗を持つチェーン店のものもあります。それを見て、地元のお祭りで昔よくロッチェリアのシューキを買って買ったことを思い出しました。私にとってお祭りの味だったシューキは、いつでも飲めるけれど、今でも少し特別なものです。そんな特別がいまこの場所でも生まれているのかな、などと思いながら歩いていました。(M1 前山)